

〔論文〕

0歳児クラスの食事場面における行為分析

—保育者との関わり合いに着目して—

川 中 義 博
Yoshihiro Kawanaka

大阪総合保育大学大学院
児童保育研究科 児童保育専攻

本研究の目的は、0歳児クラスの子どもの「食材を受け入れる・受け入れない」という行為に至る個別具体的な要因を明らかにすることである。保育所の0歳児クラスに在籍する3名それぞれの、月齢9か月と月齢10か月の事例を対象とし、食事場면을撮影した映像を基にして作成した対比表を分析した。

月齢9か月の事例では、保育者からの援助を受け入れるために顔を前に出すことが3人の子どもに共通した要因であったが、援助を受け入れるときの姿は3人ともに違いが見られた。F児は、小さく口を開ける姿やゆっくりとお茶を飲む様子が見られた。G児は笑顔でスプーンを見てから顔を前に出して食べており、I児は両手を上げて大きく口を開ける姿やゆっくりと近づいて取り込んでいた。月齢9か月と月齢10か月の事例では、保育者からの言葉かけを通して食べることが3人の子どもそれぞれの要因だった。その中でも保育者からの援助を受け入れる3人の子どもの姿には、月齢9か月と月齢10か月それぞれにおいて異なる様子が見られた。

個性のある要因としては、保育者の援助に対して体ごと左に向けるといった行為や、好きな食材を食べる喜びや嬉しさ、自分で食材を食べ進めたいといった、子ども自身の思いが示された。また、子どもが満足できるようにスプーンに乗せる食材の量を調節することや、食材を自ら取り込めるように口へ近づける距離を調整することなどが、保育者の援助として見られた。

キーワード：乳児保育、離乳食、行為分析、保育者、食事援助

I. はじめに

2017年改定の保育所保育指針では、乳児保育における三つの視点として整理された保育内容の一つに、身体的発達に関する視点「健やかに伸び伸びと育つ」が明記された。保育所保育指針の「健やかに伸び伸びと育つ」の内容の取扱いには、「健康な心と体を育てるためには望ましい食習慣の形成が重要であることを踏まえ、離乳食が完了期へと徐々に移行する中で、様々な食品に慣れるようにするとともに、和やかな雰囲気の中で食べる喜びや楽しさを味わい、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること」と記載がある。保育所保育指針解説では、「保育士等が一人一人に丁寧にに関わり、子どもと保育者等の感情が共有されるような状況の下、子どもの食べることへ向かう気持ちが促されていくことが大切である」と記されている。

2004年発刊の『楽しく食べる子どもに～食からはじ

まる健やかガイド～』には、食事場面における子どもへの丁寧な関わり意義が記され、「食を営む力」を育むためには具体的にどのような“食べる力”を育むことがよいのかについて、表「発育・発達過程に応じて育てたい“食べる力”について」が作成されている。山王堂(2019)は表について、「授乳期・離乳期の食事は、生涯における食習慣の原点となる重要な時期」であり、「安心と安らぎ」のなかで“食べる意欲”の基礎づくりの時期である」と説明している。2019年刊行の『授乳・離乳の支援ガイド』では、「離乳の進行は、子どもの発育及び発達の状況に応じて食品の量や種類及び形態を調整しながら、食べる経験を通じて摂食機能を獲得し、成長していく過程である」とし、「食事を規則的に摂ることによって生活リズムを整え、食べる意欲を育み、食べる楽しさを体験していくことを目標」としている。大方(2020)は、『子どもの育ちを支える食～保育所等における「食育」の言語化～』の中で、「食事は生きる力の基礎を育む上で大切なもの」とし、「食事は空腹を満たすだけでなく、信頼関係の基礎をつくる営み」であり、「食事は生涯を通じた影響を及ぼすもの」であるから、「食を通じた保育実践は生涯にわたる子どもの最善の利益と言わ

れるように、心に沁みる丁寧な取り組みであってほしい」と述べ、子どもの成長・発達においては食育が不可欠であるとしている。

つまり、西村（2020）が述べるように「食べさせてもらう」受け身のように見えるが、食事の際の基本的な姿勢や食べ物を口に迎える（捕食）ときの体の使い方、咀嚼、嚥下などの「食べるための機能」を学んでいるため、子どもの意欲を尊重しつつ、子どもひとりではまだできない部分を保育者が判断し、援助する必要がある。

1. 0歳児の食事場面についての先行研究

中澤（2001）は、中期食後半～後期食には手で食べる食品を一部導入し、乳児の能力に合わせながらもなるべく自分の手で食べるように介助し、自分で食べたい気持ちを育てることが重要だと示唆している。石黒（2003）は、保育者は「子どもに食べさせる人」ではなく、子どもと「食べることを巡って交渉する存在」だと述べ、保育者に求められている保育の技とは、「食べさせるための」技能ではなく、「子どもが能動的に食べる」ように交渉する技として、保育活動における食介助構造を明らかにしている。河原（2009）は、乳幼児の食行動が、子どもの摂食様態、子どもの拒否行動と養育者の対応及び静止行動を見ることによって、子どもの能動性がぶつかりあい、相互に調整されることにより、子どもの自立心が促進される中で、「食の自律」をふまえた「文化的食事の自律」へと発達のプロセスをたどると述べている。根津（2010）は、「乳児が自ら食べようとすることに先行して、文化の中でモノや人の行為が持つインデックスとしての機能にまなざし（関心）を向けられるということが出現する」ことは、「自ら食べることについての『主体性』を獲得することへの入り口」だと記している。森田ら（2013）は、0歳児クラス担任保育士の離乳食に対する知識や意識の現状について、食べる際の言葉かけ、ペースの確認、咀嚼や飲み込み状態に合わせた個別対応などの回答が高いことを述べている。遠藤ら（2019）は、保育所における離乳期の食事援助についての悩み事や、養成教育・現職研修の状況について質問紙調査を行い、伊藤ら（2020）は、食べる営みを支える保育者の援助のあり方、食事以外の場面における手指の使い方と関連等について調査している。淀川ら（2019）は、食事場面における「子どもの心地よさ」を観点として、保育者の援助や環境構成について専門知を明らかにしている。さらに淀川ら（2022）は、発達に合わせて子どもの心地よさを支えるためにどのように援助や環境構成をしている、子どもと保育士の関係性が変容した具体についても研究している。

以上のように先行研究で述べられていることから、人として生きていくための力の基礎を培う重要な0歳児保育において、子どもが保育者の援助を受け入れて食べるという行為に至った経緯や、保育者の援助を受け入れずに食べなかったという行為の要因を検討することで、食事場面における子どもの理解に繋がると考えられる。そこで本研究では、保育所の0歳児クラスの食事場面において、子どもが「食材を受け入れる・受け入れない」という行為に至った個別性のある要因について明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

（1）対象者

調査対象者は大阪府内公立X保育所0歳児クラスに在籍する9名の内3名と、対象児に援助を行っていた保育者1名である。『授乳・離乳の支援ガイド』では、生後9か月～11か月を離乳後期とし、9か月頃から始まる手づかみ食べについて、「食べ物を触ったり、握ったりすることで、その固さや触感を体感し、食べ物への関心につながり、自ら食べようとする行動につながる」ことが記載されている。そこで、主に保育者から援助を受けて食事を進めていた月齢9か月と自食行為へと移行しつつある月齢10か月の事例を続けて観察することのできた3名を、0歳児クラスに在籍する9名から抽出している。0歳児クラスは4名の担任保育者が在籍しているが、本研究における分析の了承を得た担任経験3度目のA保育者を、援助する保育士として選んでいる。

なお、以降の文中において、9か月は【月齢9か月】、10か月は【月齢10か月】を表す。

（2）観察期間と分析対象回

2020年7月から2020年11月の期間、X保育所の0歳児クラス保育室内で月に1～3回の頻度でビデオカメラを用いて動画を撮影し、音声記録した。ビデオカメラは、食事前から食事終了までの対象児と保育者とのやりとりの全容が見えるように、1m離れた場所で定点固定した。撮影を行った詳細な日程は、表1に記載している14件（総時間2時間48分1秒）である。日付の横には、観察時の対象児の月齢を記している。対象児の9か月と10か月にあたる事例は10件（総時間2時間2秒）であった。そのうち、観察数が一番少なかった対象児の事例数に合わせて、各対象児の9か月と10か月の事例を1件ずつ抽出し、計6件（総時間1時間14分7秒）を分析対象回とした。コンディションを揃えるために食事開始時間は、3人の対象児の9か月と10か月を比較し、10分以内の差の事例を抽出した。献立内容は、

9か月では主食の煮込みうどんとデザートのパナナ、10か月においては主食の米類と主菜の白身魚が同じ事例を抽出した。

表1 観察日の詳細について

撮影月 対象児	7月	8月	9月	10月	11月
F児	7/13 (9か月)	8/ 7 (10か月)	9/12 (11か月)	10/27 (1歳0か月)	なし
G児	なし	8/20 (9か月) 8/31 (9か月)	9/15 (10か月)	10/ 9 (10か月)	なし
I児	なし	なし	9/ 1 (7か月) 9/30 (8か月)	10/ 6 (9か月) 10/12 (9か月)	11/17 (10か月) 11/27 (10か月)

(3) 調査方法

遠藤ら(2019)は先行研究の中で、月齢8～11か月児の食事場面における4組の子ども－保育者間のやりとりを分析した。そこでは、子どもが保育者の援助により口にした回数、子ども自身の手で口にした回数、保育者が食べ物子どもの口へ運ぼうとした回数、その食べ物を子どもが拒否した回数をカウントしていた。本研究では、子どもが「食材を受け入れる・受け入れない」という場面を対象とするため、遠藤らの研究を踏まえて、0歳児の子どもが食材を食べるという行為に至るための手段である、『保育者から援助を受けて食べる』と『子どもが自ら口へ食材を運ぶ』という視点から、①「保育者の援助を受けて食材を食べる」、②「保育者の援助を受け入れない」、③「子どもが自ら食材を食べる」という3つのカテゴリーに分類し、撮影した映像から対象児の食事場면을集計する。

次に子どもと保育者との関わり合いについて、撮影した映像を見返ししながら音声を取り出し、対比表を作成する。子どもは食事を開始した時間帯では意欲的に向かうことができるが、一定時間経過すると食事以外の物事に対しても興味が向き始めるため、子どもの行為に変化が見られると考えられる。そこで、子どもが初めに食材を口にする直前を開始時間とし、それからの5分間の対比表を作成する。

そして、3つに分類した子どもの「食材を受け入れる・受け入れない」という行為が、保育者との前後のやりとりの中でどのような要因と結びついているのかを検討する。

なお、本文における「行為」とは、子どもが保育者の援助を受け入れて「食材を受け入れる」または「食材を受け入れない」ことを表す。

(4) 食事の進め方

X保育所の0歳児クラスは、玩具を設置している遊びコーナーと食事コーナーを、保育室内で分けている。食

事時間は、3グループが25分ずつ(授乳時間を含む)で交代し、10時40分から進めている。各グループには1～3名の子どもがおり、保育者2名が援助を行っている。食事時間は、子どもの機嫌や体調によって変更することもあるが、日々の日課として固定している。

今回の全事例において、対象児と保育者は一対一で食事を進めている。F児とG児は、9か月・10か月ともに、チェアーと呼ばれるテーブル付きの椅子を使用しており、保育者が対面に座って援助を行っている。I児は、9か月の事例では保育者の膝の上で食事を進めているが、10か月の事例ではチェアーを使用しながら保育者と対面に座っている。

9か月において使用していた食具は、乳児用スプーン、乳児用フォーク、茶碗、小鉢、小皿、手づかみ用小鉢、コップが共通している。I児のみ、くわえる部分が小さい乳児用スプーンも用いている。10か月における食具は共通しており、乳児用スプーン、乳児用フォーク、茶碗、汁椀、小鉢、手づかみ用小鉢、コップである。食事を進める上で、食具を乗せた食事用トレイ(33cm×23.5cm)を置くために、「食台」と呼ばれる30cm四方の補助台を全事例で使用している。

(5) 対象児とA保育者との食事場面での関係性

X保育所では、保育者が特定の子どもに対して継続して援助を行う担当制を、食事場面に取り入れている。担当保育者の不在時に、他の保育者が援助を行う機会は月に1～2回である。食事時間以外では、食事の担当児かどうかを分け隔てることなく生活しており、日々の遊びにおいても、子どもと保育者は一緒に関わり合っている。

F児(2019年9月生、女児)が保育所で離乳食を食べ始めたのは、観察を行う1か月前の6月だった。6月は担当保育者が不在の時はなかったため、A保育者から初めて援助を受けたのは、今回観察した7月の事例であった。担当保育者によると、6月中は食事に対する意

欲が見られにくかったが、7月に入ってから食事を進めることに対して喜びを感じる姿が見られ始めたとのことだった。

G児（2019年11月生、女児）が担当保育者から援助を受けなかった機会は、観察を行った1か月前の7月に2回であり、そのうちの1回はA保育者からの援助であった。G児がA保育者から援助を受けたのは、8月の事例で2回目だった。G児は、担当保育者が食材を口へ運ぼうとすると積極的に口を開けていると申し送りするほど、食事を進めることに嬉しさを感じていた。

I児（2020年1月生、女児）は、A保育者が離乳食開始時から継続的に援助を行っていた担当児である。I児がA保育者以外の保育者から援助を受けた機会は、観察を行った1か月前の9月に2回あった。I児は授乳を受ける姿勢やミルクの温度に好みが見られていたが、離乳食を食べ始めるとどの食材に対しても積極的に口を開けて援助を受け入れる姿を見せていた。また、十分にお腹を空かせた状態でなければ授乳や食事を進めることを拒んでいたため、食事開始時間の調整に対する配慮が必要であった。

（6）倫理的配慮

本研究の調査で行う映像撮影については、施設内にお

ける0歳児クラスの保育検討会の議題内容として撮影を行う。研究対象の施設長および0歳児クラスの担任保育者4名に対して口頭で説明し、同意を得ている。対象児の保護者へは、研究対象施設の「個人情報取り扱いに関する同意書」の中で、情報管理が保たれている教育機関との連携や施設内外の保育研究活動に必要な範囲内での利用において同意を得ている。撮影したデータについては、施設内の金庫で保管しており、保管期間を10年とする。また、子どもと保育者の名前はアルファベットを用いた仮名で記し、個人が特定されないよう配慮する。

Ⅱ．子どもと保育者の関わり合いについて

分析対象の事例は、対象児3名の9か月と10か月を各1件ずつ、合わせて6件である。表2では、6件の事例の概要を整理している。月齢は【子どもの観察時の月齢】、観察日時は【観察日の日付と観察開始及び終了時間】を示している。3つのカテゴリーに分類した、対象児の「食材を受け入れる・受け入れない」姿の回数は、①②③に記している。なお、①は【保育者の援助を受けて食材を食べる】、②は【保育者の援助を受け入れない】、③は【子どもが自ら食材を食べる】という分類を示しており、以降の文中においても、同じ表記を用いることと

表2 分析対象事例の概要

対象児	月齢	観察日時	①	②	③	観察日の献立内容	観察時間
F児	9か月	7月13日 10時58分 ～11時15分	28	15	0	煮込みうどん（うどん、鶏ミンチ肉、玉ねぎ、人参、ねぎ）、さつまいもの甘煮（半量残す）、バナナ	16分39秒
G児	9か月	8月31日 10時44分 ～10時53分	37	3	0	煮込みうどん（うどん、鶏ミンチ肉、玉ねぎ、人参）、なすの煮びたし（なす、人参、いんげん）、バナナ	9分13秒
I児	9か月	10月12日 11時29分 ～11時40分	49	5	0	煮込みうどん（うどん、鶏ミンチ肉、玉ねぎ、人参）、煮物（人参、キャベツ）、バナナ	11分20秒
F児	10か月	8月7日 11時02分 ～11時15分	44	11	0	七分粥、白身魚の煮物、みそ汁（なす、かぼちゃ）	12分52秒
G児	10か月	9月15日 10時47分 ～10時57分	35	9	2	軟粥、白身魚の煮物、スープ（人参、白菜、玉ねぎ）	9分17秒
I児	10か月	11月17日 11時21分 ～11時36分	42	14	7	軟粥、白身魚の煮物、にゅうめん（そうめん、人参、ほうれん草、玉ねぎ）	14分43秒

注 ①保育者の援助を受けて食材を食べる
 ②保育者の援助を受け入れない
 ③子どもが自ら食材を食べる

する。観察時間は【事例の録画時間】、食具は【食事場

面において使用していた食具】を示している。

1. 9か月の子どもの食事場面

今回提供した食材で、主食は3人とも同じ煮込みうどん、副菜は3人全て異なる食材であった。3人全員が③において0回だったことから、9か月の時点では3人ともに保育者の援助を通して食べ進めている時期であった。

F児は、①において28回見られており、3人の中では最も少なかった。②は15回であり、3人の中では最も多く、他の2人に比べて非常に多いことがわかる。観察時間は16分39秒であり、3人の中で一番時間が長かった。さつまいもの甘煮は、2分の1の残食であった。

G児は、②において3人の中で最も少ない3回であった。観察時間は9分13秒であり、3人の中で一番時間が短く、残食がない中でも一番早く食べ終えていた。

I児は、①において49回と3人の中で最も多かった。②では一番少ないG児と2回の差であったが、一番多いF児とは10回の差が見られた。観察時間は11分20秒で、一番短かったG児とは2分7秒の差があり、一番長かったF児とは5分29秒の差があった。

2. 10か月の子どもの食事場面

今回提供した主食は、F児のみが七分粥で、他の2名は軟飯であった。副菜は3人とも同じ白身魚の煮物であり、汁物は全て異なるメニューであった。3人とも残食はなく、観察時間内に完食していた。

F児は、①が44回見られており、3人の中で最も多かった。保育者からの援助を通して食べ進めていた段階であったため、③は0回であった。観察時間は12分52秒であり、一番短かったG児とは3分35秒、一番長かったI児とは1分51秒の差が見られた。

G児は、①が35回、②が9回見られ、どちらも3人の中で最も少なかった。観察時間は9分17秒であり、3人の中で最も短い時間であり、最も長かったI児とは5分26秒の差が見られた。

I児は、②では14回見られており、3人の中で最も多く、一番少ないG児とは5回の差があった。③は3人の中で最も多い7回で、最も少なかったF児とは7回の差が見られていた。観察時間は14分43秒であり、3人の中で最も長い時間であった。

3. 9か月と10か月の子どもの食事場面の比較

F児は、10か月を迎えると食事を完食した上で、観察時間が2分47秒短くなっていた。①は28回から44

回に増加し、②では15回から11回に減少していた。9か月と10か月において、③は両方が0回であった。

G児は、9か月と10か月においての観察時間が4秒の差であった。①では37回から35回へと2回減少したが、②は3回から9回へと6回増加していた。③においては、9か月では0回であったが、10か月になると2回へと増加していた。

I児の観察時間は、9か月と10か月にかけて3分23秒長くなっていた。①は49回から42回と減少し、②では5回から14回へと増加していた。③は、0回から7回へと増加していた。

4. 子どもと保育者との関わり合いについての考察

9か月の子どもの食事を進める姿として、主に保育者から食材を口に運んでもらう姿が見られた。また、保育者の援助を通して「食材を受け入れる・受け入れない」という回数においては、全ての 카테고리において3人の中で差が見られた。これらの結果は、子どもの食べ進めるペースには個人差が大きいことを示しているため、一人ひとりの子どもの食べるペースに合わせた関わりが保育者には必要だと言える。

10か月の子どもにおいては、自ら食材を口へ入れる姿が2人に見られたが、手づかみ食べをしにくい形状の食材を食べる時期でもある。そのため、9か月の子どもと同様に、保育者から食材を口へ運んでもらう援助も必要であった。つまり10か月の子どもには、子どもが自分で食べ進められる食材を用意するといった食事環境の調整が求められる。さらに、自ら食べ進めることの難しい食材（お粥やスープ、崩れやすい食材）を口へ運ぶ援助も継続して必要である。

9か月から10か月にかけて、保育者から援助を受けて食材を食べ進めるだけではなく、手づかみ食べをしつつある姿が2人の子どもに見られていた。つまり、子どもが食材に対して興味を示した時に、手づかみ食べのできる食材を用意することで、「自分で食べ進めたい」という思いを十分に味わうことができ、食事を自ら進める主体者へと成長することに繋がると言える。

子どもの「食材を受け入れる・受け入れない」という行為の回数の結果や食事の観察時間に着目することで、3人の子どもと保育者には、それぞれ異なる関わり合いが行われていることがわかる。さらに実際に食べている子どもの詳細な姿を検討することで、子どもが「食材を受け入れる・受け入れない」という行為に至る個別具体的な要因について明らかにできると考えられる。

Ⅲ.「食材を受け入れる・受け入れない」という行為に至る特徴について

作成した対比表から、子どもの行為に関連する保育者との関わり合いの前後を抜粋したものが、表3から表8である。経過時間は、【観察を開始してから経過した時

間（分：秒）】、番号は【カテゴリーの分類－カテゴリーの通し番号】を示している。二重下線はやりとりの区切りを表している。保育者との関わり合いで見られた子どもの行動の特徴を整理し、子どもが「食材を受け入れる・受け入れない」という行為に至る要因について考察していく。

1. F児（9か月）と保育者との関わり合い

表3 F児（9か月）の行為が見られた保育者との関わり合い

経過時間	番号	F児の行動	A保育者の行動
0：30			小鉢の芋をすくい、「お芋ちゃん」と言いながらF児の口へ近づける。
0：34	①－1	口を開けて食べる。	
0：45		顔を前に少し出す。	スプーンを口へ近づける。
0：48	①－2	小さく口を開けて食べる。	
0：55			「Fちゃん、おいしいね」と言いながら、うどんを乗せる。
		A保育者の顔を見ながら飲み込み、再度A保育者の顔を見る。	F児がA保育者を見たタイミングでスプーンを口に近づける。
1：02	①－3	口を開けて食べる。	
1：15			「Fちゃん、おいしいね」と言いながら、小鉢に入った芋をF児の口へ近づける。
1：18	②－1	口を閉じたまま、小鉢に入った芋を見る。	
1：50			「Fちゃん、上手に食べれるようになったな。すごいすごい」と言いながらスプーンをF児の口へ近づける。
1：51	①－4	食べたものの少し顔をしかめる。	
2：14			F児の口の中をのぞきながら芋を口へ近づける。
2：19	①－5	小さく口を開けて食べる。	
2：47	②－2	口を閉じたまま椅子からずれるように動いたが、体勢を戻し、そのまま口を動かす。 A保育者が持つ茶碗を見つめながら体を前に倒し、テーブルを3回たたく。	「うれしいうれしい。」と言いながらうどんをスプーンでF児の口へ運ぶ。
			スプーンでF児の口へうどんを近づける。
2：58	①－6	小さく口を開けて食べる。	
3：09		少しずつ飲み込む。	
3：21	①－7	体を少し倒して前かがみになり、スプーンをくわえる。	ゆっくりとスプーンをF児の口の前へ近づける。
3：32		口を動かしていたが、口を開けてオェツとなる。	

3 : 54	①- 8	少し難しい表情をしながら口を動かす。 前かがみになって口を近づけて、ゆっくりと2回飲む。	「いける？」と言いながら、テーブルの上に落ちた肉を取り除く。 「お茶飲もうか、Fちゃん」と言いながら、お茶を口へ近づける。
4 : 13		食台の上にあるうどんの入った茶碗を見る。	
4 : 16	①- 9	口を開けて食べる。	F 児の口の中を見ながらゆっくりと口へ運ぶ。
4 : 49	②- 3	口を開けたが、食べずに口を閉じ、顔を後ろに引く。	「いくで」と言葉をかける。
	②- 4	下を向いて、手で足を触る。	「あかんか」と言いながら、F 児の口へスプーンを近づける。
	②- 5	顔を体ごと左にそむけて、側のテーブルに左手を伸ばす。	スプーンをF 児の口へ近づける。
4 : 59	①- 10	違う方向を向きながらも、少し口を開けて食べる。	「Fちゃん」と言葉をかける。

(1) 保育者からの言葉かけ

保育者からの言葉かけについて表3を見ると、①- 1では、A 保育者が小鉢から芋をすくって「お芋ちゃん」と言いながら口へ近づけたことで食べている。①- 4では、「Fちゃん、上手に食べれるようになったな。すごいすごい」と認めながら、A 保育者がスプーンをF 児の口へ近づけると、F 児は食べたものの少し顔をしかめている。①- 10では、A 保育者が「Fちゃん」と呼びかけると、F 児は違う方向を向きながらも、少し口を開けて食べている。

(2) 援助を受け入れる気持ち

表3の援助を受け入れる気持ちでは、①- 2において、F 児が顔を前に出したタイミングでスプーンを口へ近づけたことで、F 児は小さく口を開けて食べている。①- 7では、A 保育者がゆっくりとスプーンを口の前へ近づけると、F 児は体を少し倒して前かがみになり、スプーンをくわえている。①- 8では、A 保育者が「お茶飲もうか、Fちゃん」と言いながら、コップを口へ近づけると、少し難しい表情で口を動かしていたF 児は前かがみになって口を近づけ、ゆっくりと2回飲んでいく。

(3) 保育者によるタイミングの把握

表3の保育者によるタイミングの把握について、

①- 3ではF 児がA 保育者の顔を見ながら口の中の食材を飲み込み、再度A 保育者の顔を見た時に、スプーンを口へ近づけてもらったことで食べている。①- 5では、A 保育者がF 児の口の中をのぞきながら芋を口へ近づけたことで、F 児は小さく口を開けている。①- 9では、A 保育者がうどんの入った茶碗を見ているF 児の口の中を見ながらゆっくりと口へ運ぶと、F 児は食べている。

(4) タイミングの合わない援助

表3のタイミングの合わない援助では、①- 6において、テーブルを3回たたきF 児に、A 保育者は「上手上手」と言葉をかけてから、スプーンでうどんを口へ近づけている。F 児は口の中の芋を飲み込んでから、小さく口を開けている。②- 1では、「あーおいしいわ」とA 保育者が言葉をかけながら、小鉢に入った芋を口へ近づけると、F 児は口を閉じたまま、小鉢に入った芋を見つめている。②- 2では、A 保育者が「うれしいうれしい」と言いながらうどんをスプーンで口へ運ぼうとすると、F 児は口を閉じたまま椅子からずれるように動いたが、体勢を戻してそのまま口を動かしている。

(5) 援助を受け入れたくない気持ち

表3の援助を受け入れたくない気持ちとして、②- 3

では、A 保育者が「いくで」と言葉をかけると、F 児は口を開けたが、食わずに口を閉じ、顔を後ろに引いている。②-4では、A 保育者が「あかんか」と言いながら、もう一度 F 児の口へスプーンを近づけると、F 児は下を向いて、足を触っている。②-5では、A 保育者がスプーンを F 児の口へ近づけると、F 児は顔を体ごと左に背けて、側のテーブルに左手を伸ばしている。

(6) F 児（9か月）の「食材を受け入れる・受け入れない」という姿

A 保育者からの「F ちゃん」や「お芋ちゃん」という呼びかけや、「F ちゃん、上手に食べれるようになったな。すごいすごい」といった認める言葉かけを通して、F 児が食べている。そのような関わりから食べた場合でも、顔をしかめる様子や違う方向を向く姿が見られている。

受け入れたいという思いとして F 児が A 保育者の方へ前かがみになっている時や顔を前に出している時に援

助を行うことで、食べる姿が見られている。その中でも、開ける口が小さい様子やゆっくりと味わうように飲む姿が見られている。

A 保育者は F 児が A 保育者の顔を見た時や F 児の口の中の様子を把握した時など、F 児が嚥下し終えた際に援助している。その関わりを通して、F 児は小さい口になることもあるが受け入れている。

A 保育者が口に運んだ際に F 児の口の中に食材が入っていた場合でも、F 児は飲み込んでから受け入れることがある。しかし、食材を見つめる様子や態勢を整えようとして、受け入れないこともある。

A 保育者が、勢いをつける言葉や食べられるかどうかを確認する言葉をかけて F 児の口へ食材を近づけるが、F 児は口を開けたが閉じ、A 保育者が近づけた食具から顔を背け、下を向いている。また、A 保育者の援助自体を受け入れたくないという気持ちから、体ごと右に向けて援助を拒むこともある。

2. G 児（9か月）と保育者との関わり合い

表4 G 児（9か月）の行為が見られた保育者との関わり合い

経過時間	番号	G 児の行動	A 保育者の行動
0 : 11	①-11	口を動かして、A 保育者の手元を見る。	茶碗を手に取り、スプーンでうどんを混ぜる。
0 : 20		A 保育者の顔を見ながら、顔を少し前に出して食べる。	うどんをすくったスプーンを揺らしながら、G 児の口へ近づける。
0 : 27	①-12	A 保育者の手元を見ている。	うどんを混ぜながら、スプーンですくう。
0 : 31		スプーンを見ながら食べる。	スプーンを G 児の口へ近づける。
0 : 47	①-13	A 保育者の顔を見ながら食べる。	「もぐもぐもぐもぐ」と言いながら、G 児の口へ運ぶ。
0 : 48			
1 : 24	①-14	スプーンを見つめてから、顔を前に出して食べる。	「好き？これ。バナナ好きやった？」と言いながら、スプーンでバナナをすくい、G 児の口へ近づける。
1 : 30		A 保育者の顔を見ながら、右足を上下に揺らす。	
1 : 38	①-15	笑顔を見せながら、A 保育者が持つ茶碗を見る。	スプーンを G 児の口へ近づける。
1 : 41		笑顔でスプーンを見てから食べる。	
1 : 55			「もぐもぐもぐもぐ」と言いながら、スプーンを G 児の口へ近づける。

1 : 56	①-16	スプーンを見ながら食べる。	
2 : 39			茶碗を手に取ってうどんをすくい、G児の口へ近づける。
2 : 41	①-17	A 保育者がすくう様子を見て、口を開けて食べる。	
2 : 50		A 保育者の手元を見て、「えーえー」と言いながら悲しそうな表情を見せる。	小鉢を手に取り、スプーンですくおうとする。
3 : 01	①-18	口を開けて食べる。 チェアの右側から食台のある方へ体を乗り出そうとする。	「どうしたん？」と言いながら、スプーンをG児の口へ近づける。
3 : 04			「もぐもぐ」と声をかけながら、G児の口へ近づける。
3 : 05	①-19	体の向きを前に戻して、スプーンを見ながら食べる。	
3 : 14		A 保育者の持つバナナの小皿を見つめる。	
3 : 16	①-20	A 保育者の顔を見ながら、口を大きく開けて、微笑んで食べる。	スプーンでバナナをすくい、G児の口へ近づける。
3 : 53			茶碗を手に取ってうどんをすくい、G児の口へ近づける。
3 : 55	①-21	スプーンを見てから、口を大きく開けて食べる。	
4 : 40			茶碗のうどんをスプーンですくい、G児の口へ近づける。
4 : 42	①-22	茶碗の中を見ながら食べる。	
4 : 59			「もぐもぐもぐもぐ」と言いながら、スプーンに乗せたうどんを茶碗と一緒に近づける。
5 : 00	①-23	茶碗の中を見てから口を開け、A 保育者の顔を見ながら食べる。	

(1) 保育者からの言葉かけ

保育者からの言葉かけについて表4を見ると、①-13では、A 保育者が「もぐもぐもぐもぐ」と言いながら口へ運ぶと、G児はA 保育者の顔を見ながら食べている。①-16では、A 保育者が「もぐもぐもぐ」と言いながらスプーンを口へ近づけると、G児はスプーンを見ながら食べている。①-19では、A 保育者が「もぐもぐ」と声をかけながらスプーンを口へ近づけると、チェアから体を乗り出そうとしていたG児は、体の向きを前に戻して、スプーンを見ながら食べている。

(2) 食材や保育者の手元を見る

表4における食材や保育者の手元を見る姿として、G児は①-12において、うどんを混ぜながらスプーンですくうA 保育者の手元を見ており、スプーンが口に近

づく様子を見ながら食べている。①-17では、A 保育者が茶碗を手に取ってうどんをすくう様子を見つめ、スプーンが近づくと口を開けて食べている。①-21では、A 保育者が茶碗を手に取ってうどんをすくい、口へ近づけると、G児はスプーンを見てから、口を大きく開けて食べている。①-22では、A 保育者が茶碗のうどんをスプーンですくって口へ近づけると、G児はお碗の中を見ながら食べている。①-23では、A 保育者が「もぐもぐもぐもぐ」と言いながら、スプーンに乗せたうどんを茶碗と一緒に近づけると、G児は茶碗の中を見てから口を開け、A 保育者の顔を見ながら食べている。

(3) 援助を受け入れる気持ち

表4の中の援助を受け入れる気持ちとして、F児は①-11において、スプーンでうどんを混ぜるA 保育者

の手元を、口を動かしながら見ている。そこへA保育者がうどんをすくったスプーンを揺らしながら口へ近づけると、A保育者の顔を見ながら、顔を少し前に出して食べている。①-15では、A保育者の持つお椀を笑顔で見た後にA保育者がスプーンを口へ近づけると、G児は笑顔でスプーンを見てから食べている。①-18では、A保育者が小鉢を手に取りスプーンですくおうとすると、A保育者の手元を見て、「えーえー」と言いながら悲しそうな表情を見させている。「どうしたん？」と言いつつも、スプーンを口へ近づけると、G児は口を開けて食べたが、その後で食台のある方へ、チェアーの左側から体を乗り出そうとしている。

(4) 食事への期待感

表4における食事への期待感として、①-14では、A保育者が「好き？これ。バナナ好きやった？」と言いながら、スプーンでバナナをすくって口へ近づけると、G児はスプーンを見つめてから、顔を前に出して食べている。その後にG児は、A保育者の顔を見ながら、右足を上下に揺らす姿を見させている。①-20では、A保育者の持つバナナの皿を見つめており、A保育者がスプーンでバナナをすくって口へ近づけると、G児はA保育者の顔を見ながら、口を大きく開けて、嬉しそうに食べている。

(5) G児（9か月）の「食材を受け入れる・受け入れない」という姿

A保育者が「もぐもぐもぐもぐ」と咀嚼を促しながら

ら口へ運ぶと、G児はA保育者の顔を見ながら食べる姿や、スプーンを見ながら食べる様子を見せている。また、A保育者が「もぐもぐ」と言葉をかけたことで、G児は食事に対して意識が向いて、チェアーから乗り出そうとしていた体の向きを前に戻して食べている。

A保育者の手元を見ることで、G児はスプーンが口に近づく様子を見ながら食べる姿や、タイミングを合わせて口を開ける姿を見せており、開ける口の大きさにも違いが表れている。さらに、A保育者がスプーンを近づけると、G児はA保育者が持つ茶碗の中を見ながら口を開けて食べる姿や、茶碗の中を見てからA保育者の顔を見ながら食べる様子が見られている。

保育者の援助を受け入れる気持ちとして、A保育者がスプーンを近づけると、G児はA保育者に向けて顔を前に出す姿を見せている。また、A保育者の手元を見た後に、A保育者の顔を見ながら食べる場合や、笑顔でスプーンを見てから食べる様子も見られている。そして、食べたいと思っていた食材ではなかった気持ちから「えーえー」と言いながら悲しそうな表情を見せた際には、A保育者の援助を受けて食べるものの、チェアーの左側から食台のある方へ体を乗り出そうとするG児の姿も見られている。

A保育者がスプーンでバナナをすくって口へ近づけると、G児はスプーンを見つめてから顔を前に出して食べ、右足を上下に揺らす姿を見させている。また、バナナの皿を見つめていたG児は、バナナをすくって口へ近づけるA保育者の顔を見ながら、口を大きく開けて微笑んで食べている。

3. I児（9か月）と保育者との関わり合い

表5 I児（9か月）の行為が見られた保育者との関わり合い

経過時間	番号	I児の行動	A保育者の行動
0:42	①-24	A保育者がすくう手元をじっと見つめる。	「お待たせしましたね」と、多めにうどんをスプーンへ乗せて口へ近づける。
0:48		A保育者の持つスプーンを見つめながら両手を上げて、大きな口で食べる。	
0:58	①-25	大きな口を開けて食べる。	「おいしいおいしい」と言葉をかけ、小さめのスプーンに一口大の食材を乗せてI児の口へ近づける。
0:59			
1:11	①-26	手に持ったスプーンを口にくわえる。	「いくで」と言葉をかけながらスプーンを近づける。
1:15		口を開けて食べる。	

1 : 25			「もぐもぐもぐ」と言葉をかけながら I 児が咀嚼する様子を見て、スプーンを少しずつ近づける。
1 : 29	① - 27	違うところを見ていたが、飲み込んでからすぐにスプーンに口を近づけて食べる。	
1 : 37		もぐもぐとしながら食事用トレイの上の食材を見る。	
1 : 41	① - 28	口を開けながら少しずつ前かがみになり、A 保育者のスプーンをくわえる。	スプーンでうどんを I 児の口の前へ近づける。
2 : 06			
2 : 07	① - 29	A 保育者が近づけたスプーンに気付き、大きく口を開けてスプーンに自ら近づいて食べる。	「うん」と言いながらうどんを乗せたスプーンを口に近づける。
2 : 10			
2 : 12	① - 30	口の奥に食材が残っているが食べる。	「嬉しいね」と言いながら、スプーンを口へ近づける。
2 : 26		口を動かしながら、床を見る。 少しずつ飲み込む。	
2 : 33	① - 31	視線は少し違うところを見ているが、口を開けてゆっくりスプーンに近づいて食べる。	「うん」と言いながら、ゆっくりとスプーンに乗せたおかずを近づける。
3 : 23		ゆっくりと口を動かしながら、A 保育者の手元をじっと見ている。	
	② - 6	左手で持つスプーンをくわえる。 A 保育者とは反対方向へ向く。	スプーンでうどんを口に近づけようとする。
3 : 32	① - 32	左手に持つスプーンを口から離し、大きく口を開けて食べる。	「I ちゃん、おうどんは?」と言い、I 児の視線に入るようにスプーンを見せる。
3 : 42		もぐもぐと口を動かしながら、A 保育者の手元を見る。	
3 : 46	① - 33	スプーンが口の前へ来るのに合わせて食べる。	I 児の野菜を口へ近づける。
3 : 51		もぐもぐと口を動かしながら、A 保育者の手元を見る。	
3 : 55	① - 34	少し体を前に倒して、大きく口を開けて食べる。	スプーンですくいながら、「もぐもぐもぐ」と言葉をかける。 うどんをすくったスプーンを近づける。
4 : 02			「お肉もしっかり食べれるな、I ちゃん」と言葉をかけ、スプーンを口の前へ持って行って止まる。 ゆっくりと口の中へ運び、「うん」と言葉をかける。

4 : 11	① - 35	食材を取り込み、もぐもぐと口を動かしながら、顔を右に向けて F 児の様子を見る。	
4 : 19		F 児の方をじっと見ている。	笑いながら、「F ちゃんおったな」と言葉をかける。
	② - 7	スプーンに気づかずに F 児の方を見る。	スプーンを I 児の口に近づける。
4 : 23	① - 36	姿勢を元に戻して、顔を前に出しながら食べる。	「次お野菜やで」と言葉をかける。
4 : 49		A 保育者の手元を見て、左手に持つスプーンを見つめる。	
4 : 53	① - 37	大きく口を開けて食べる。	野菜をすくったスプーンを I 児の口に近づける。

(1) 保育者からの言葉かけ

保育者からの言葉かけについて表 5 を見ると、① - 26 では、A 保育者が「いくで」とタイミングを伝えてスプーンを近づけると、I 児はスプーンの柄をかじっていたが食べている。① - 29 で A 保育者は、「うん」と言葉をかけて、スプーンを口に近づけている。右手に持つスプーンをくわえていた I 児は、A 保育者が近づけたスプーンに気付くと、大きな口を開けてスプーンに自ら近づいて食べている。① - 36 では、A 保育者が「次お野菜やで」と次に食べる食材を伝え、② - 7 でスプーンに気づかず F 児を見ていた I 児は、姿勢を元に戻して顔を前に出しながら食べている。

(2) 援助を受け入れる気持ち

表 5 中の援助を受け入れる気持ちとして、① - 24 で I 児は、A 保育者がすくう手元をじっと見つめている。A 保育者が「お待たせしましたね」と食材を多めにスプーンに乗せて口へ近づけると、I 児は A 保育者の持つスプーンを見つめて両手を上げ、大きな口で食べている。① - 25 では、A 保育者が「おいしいおいしい」と言葉をかけて、一口大の食材に乗せたスプーンを口へ近づけると、I 児は大きな口を開けている。① - 28 で A 保育者は、I 児がもぐもぐと口を動かしながら食食用トレイにある食材を見ているところへ、スプーンを I 児の口の前へ近づけている。すると、I 児は口を開けながら少しずつ前かがみになり、A 保育者のスプーンをくわえている。① - 32 で A 保育者は、I 児が A 保育者とは反対方向へ向いたため、I 児の目線に入るようにスプーンを見せている。I 児は左手に持つスプーンを口から離すと、大きく口を開けている。① - 35 では、A 保育者が「お肉もしっかり食べれるな、I ちゃん」と言葉をかけ、スプーンを口の前へ持っていったり止めている。次に、I 児が大きく口を開けて A 保育者のスプーンに

近づくと、A 保育者はゆっくりと口の中へ運び、「うん」と言葉をかけている。I 児は食材を取り込み、もぐもぐと口を動かしながら、顔を左に向けて F 児の様子を見ている。

(3) 保育者によるタイミングの把握

保育者によるタイミングの把握について表 5 を見ると、① - 27 で A 保育者は、「もぐもぐもぐ」と言葉をかけながら咀嚼する I 児の様子を見て、スプーンを少しずつ近づけている。I 児は違うところを見ていたが、食材を飲み込んでからすぐにスプーンに口を近づけて食べている。① - 31 では、I 児が口を動かしながら床を見て、少しずつ飲み込んでいくところへ、A 保育者はゆっくりとスプーンに乗せたおかずを近づけている。そこへ、I 児は目線を少し違うところへ向けながらも、口を開けてゆっくりスプーンに近づいて食べている。

(4) 食材や保育者の手元を見る

食材や保育者の手元を見る姿について表 5 の中で、A 保育者は① - 33 において、I 児がもぐもぐと口を動かしながら A 保育者の手元を見ているところへ、I 児の口へ運ぼうとしている。I 児はスプーンが口の前へ来るのに合わせて食べている。① - 34 で I 児は、もぐもぐと口を動かしながら A 保育者の手元を見ている。A 保育者は、スプーンですくいながら「もぐもぐもぐ」と言葉をかけている。A 保育者がうどんをすくったスプーンを近づけると、I 児は A 保育者に向けて少し体を前に倒して、大きく口を開けている。① - 37 で I 児は、A 保育者の手元を見てから、左手に持つスプーンを見つめている。そこへ A 保育者が野菜をすくったスプーンを I 児の口に近づけると、I 児は大きく口を開けている。

(5) タイミングの合わない援助

表5の中のタイミングの合わない援助として、①-30でI児は、A保育者が「嬉しいね」と言いながらスプーンを口へ近づけると、I児は口の奥に食材が残っているが食べている。②-6では、I児がもぐもぐと口を動かしながら周りの様子を見ているところへ、A保育者が「Iちゃん、おうどんは?」と言いながら口へスプーンを近づける。すると、I児は左手に持つスプーンをくわえている。②-7でスプーンに気づかずF児を見ていたI児は、姿勢を元に戻して顔を前に出しながら食べている。

(6) I児(9か月)の「食材を受け入れる・受け入れない」という姿

A保育者からの「いくで」や「うん」と言葉をかけることで、I児は自ら持つ食具への興味から食材へと意識を向けている。食事が進むと、「次お野菜やで」と次の食材を伝える言葉かけを通して、I児は姿勢を元に戻してA保育者に向けて顔を前に出して食べている。

食材を食べたいという気持ちから、I児はスプーンを口に近づける援助を、大きく口を開けて受け入れている。A保育者はI児が満足して食べ進められるように、

スプーンに乗せる食材の量を調節している。その関わりに応じるように、I児は大きく口を開けている。I児が食材に対して気持ちを向けられるように、A保育者はI児の視線にスプーンが見えるように関わっている。A保育者がI児の前に食材を近づけたり口の前で止めたりすることで、I児はA保育者に向けて顔を前に出しながら取り込んでいる。

A保育者は、I児が咀嚼する様子を見た後や、嚥下をしている姿に合わせて、ゆっくりと食材をI児の口に近づけている。I児は、食材を飲み込んでから自ら口に近づける姿や、目線を違うところに向けながらも食べている。

A保育者の手元を見ることで、I児はスプーンを近づけるA保育者のタイミングに合わせて食べている。また、A保育者が近づけたスプーンのタイミングに合わせてるように、体をA保育者に向けて前に倒して食べる姿も見せている。

I児は口の中に食材が入っている時にA保育者から援助を受けると、食べることがあるものの、A保育者の手元をじっと見ながら手に持っているスプーンをくわえて拒むこともある。

4. F児(10か月)と保育者との関わり合い

表6 F児(10か月)の行為が見られた保育者との関わり合い

経過時間	番号	F児の行動	A保育者の行動
0:00		両足を左右に勢いよく動かす。	「いただきます」と言葉をかける。 「嬉しい嬉しい」と言葉をかけながら、茶碗にかぶせたラップを取る。 お粥の茶碗を持ち、スプーンですくって口へ近づける。
0:10	①-38	大きく口を開けて食べる。	
0:34		A保育者が持つ茶碗に目を向ける。	「嬉しいね。足バタバタしてたね」と言いながら、お粥をすくったスプーンを前に近づける。
0:37	②-8	ゆっくりと口を動かし、顔を右に逸らす。	
0:54		前かがみになって、小鉢に入った魚を見つめ、両足を大きく左右に動かす。	
1:03	①-39	大きく口を開けて食べる。 両足を左右に大きく動かす。	「もぐもぐ」と言いながら、魚をすくったスプーンを口に近づける。
1:48		A保育者の手元を目で追いかけて、汁椀をのぞき込むように前傾姿勢になる。	

0歳児クラスの食事場面における行為分析

1 : 52	① - 40	口を小さく動かしながらチェアーの両脇を持って、A 保育者の持つ汁碗をのぞき込む。 飲み込んでから食べる。	スープの具をすくったスプーンを口に近づける。
2 : 15		チェアーにもたれながら、A 保育者の手元を目で追う。	
2 : 21	① - 41	元の姿勢に戻り、前かがみになりながら口を開けて食べる。	「F ちゃん、茄子もおいしいね」と言いながら、魚をすくったスプーンを口へ近づける。
2 : 35			「もぐもぐもぐ」と言葉をかけながら、お粥をすくったスプーンを口に近づける。
2 : 41	① - 42	ゆっくりと口を開けて食べる。 口に取り込みながら左下を見て、何度も両足を左右に動かす。	
2 : 56		チェアーにもたれていたのを元の姿勢に戻して、汁碗をのぞく。	
	② - 9	汁碗の中をのぞきながら、少し顔を後ろへ引く。	スープの具をすくって、口の前に近づける。
	② - 10	両足を左右に動かし、2秒の間をおく。	「あん」と言葉をかけて、スプーンを口に近づける。
3 : 03	① - 43	顔を前に近づけながら食べる。	
3 : 11		ゆっくりと口を動かしながら、A 保育者の手元を見る。	
3 : 16	② - 11	勢いよく首を右に向ける。	スプーンですくう量を調節しながら、「嬉しいね、F ちゃん」と言葉をかける。 スプーンを口へ近づける。
3 : 28		両足を左右に動かして、小鉢の中を覗き込む。	スプーンで魚をすくう。
	① - 44	大きく口を開けて食べる。 A 保育者の顔を見ながら、両足を左右に動かす。	魚をすくったスプーンを口へ近づける。
4 : 17		再度左手を頭の後ろに持っていき、前を向いて A 保育者の持つ魚の小鉢を見る。	
	① - 45	顔を前に出して、大きく口を開けて食べる。 両手を、肘を曲げた状態で上げる。	魚をスプーンですくい、口の前に近づける。
4 : 12			
4 : 32			「F ちゃん、おいしいね」と言葉をかけて、コップを持って口へ近づける。
4 : 34	① - 46	姿勢を元に戻して、ゆっくりとお茶を飲む。	
4 : 51		A 保育者が持つ汁碗を見る。	
4 : 55	① - 47	両足を左右に動かしながら、左を向いて食べる。	スープの具をすくって、口へ近づける。

(1) 保育者からの言葉かけ

保育者からの言葉かけについて表6を見ると、①-42でA保育者は、「もぐもぐもぐ」と咀嚼する言葉をかけて、お粥をすくったスプーンを口に近づけている。F児はゆっくりと口を開けて食べ、口に取り込みながら右下を見て、何度も両足を左右に動かしている。①-46では、A保育者が「Fちゃん、おいしいね」と言葉をかけて、コップを口へ近づけると、F児は姿勢を元に戻して、ゆっくりとお茶を飲んでいいる。②-11でF児は、ゆっくりと口を動かしながら、A保育者の手元を見ている。A保育者がスプーンですくう量を調節しながら、「嬉しいね、Fちゃん」と言葉をかけてスプーンを口へ近づけると、F児は勢いよく首を左に向けている。

(2) 食事への期待感

表6の中で見られた食事への期待感として、①-38では、「いただきます」とA保育者が言葉をかけると、F児は両足を左右に勢いよく動かしている。「嬉しい嬉しい」とA保育者が言葉をかけて、お粥をスプーンですくって口へ近づけると、F児は大きく口を開けて食べている。①-39でF児は、前かがみになって、小鉢に入った魚を見つめ、両足を大きく左右に動かしている。A保育者が魚をすくったスプーンを口に近づけると、F児は大きく口を開けて食べ、両足を左右に大きく動かしている。①-44では、A保育者がスプーンで魚をすくうと、F児は両足を左右に動かして、小鉢の中をのぞき込んでいる。A保育者が魚をすくったスプーンを口へ近づけると、F児は大きく口を開けている。その後にF児は、A保育者の顔を見ながら、両足を左右に動かしている。①-45でF児は、左手を頭の後ろに持っていく、前を向いてA保育者の持つ魚の小鉢を見ている。A保育者が魚をスプーンですくい、口の前に近づけると、F児は顔を前に出して、大きく口を開けて食べ、両肘を曲げながら上げている。①-47では、F児がA保育者の持つ汁椀を見ているところへ、A保育者がスプーンの具をすくって口へ近づけると、F児は両足を左右に動かして食べている。

(3) 食材や保育者の手元を見る

表6の中の食材や保育者の手元を見る姿について、F児は①-40で、口を小さく動かしてチェアの両脇を持ち、A保育者の持つ汁椀をのぞき込んでいる。A保育者がスプーンの具をすくったスプーンを口に近づけると、F児は食材を飲み込んでから食べている。①-41でF児は、チェアにもたれながら、A保育者の手元を目で追っている。そこへA保育者が「Fちゃん、茹

子もおいしいね」と言いながら、魚をすくったスプーンを口へ近づけている。F児は元の姿勢に戻り、A保育者に向けて前かがみになりながら食べている。②-8では、F児がA保育者の持つ茶碗に目を向けたところへ、A保育者はお粥をすくったスプーンを前に近づけている。F児はゆっくりと口を動かして顔を左に逸らし、震えるように前を向いて、A保育者の顔を見ている。②-9では、A保育者がスプーンの具をすくって、口の前に近づけると、F児はスプーンの容器の中をのぞきながら、少し顔を後ろへ引いている。そこへ、A保育者が「あん」と声をかけながらスプーンを口に近づけると、②-10においてF児は両足を左右に動かしている。その後の①-44でF児は、2秒の間が空いてから顔を前に近づけながら食べている。

(4) F児(10か月)の「食材を受け入れる・受け入れない」という姿

A保育者が「もぐもぐもぐ」と咀嚼を促すことで、F児はゆっくりと口を開けて食べてから右下を見て、両足を左右に動かしている。「Fちゃん、おいしいね」という言葉かけの後には、姿勢を整えてお茶を飲むF児の様子が見られている。「嬉しいね、Fちゃん」の後には、A保育者が近づけるスプーンに対して勢いよく首を左に向けて拒んでいる。

F児はA保育者が「いただきます」と言葉をかける関わりや食材を近づけることで、両足を大きく左右に動かす姿や顔を前に出して食器の中身を見る姿を見せている。特に、魚が入っている小鉢を見ることがやA保育者が魚をスプーンですくうことで、F児は両足を左右に動かし、顔を前に出して大きく口を開けている。さらに食材を食べた後には、両足を左右に動かす姿や両肘を曲げて上げる様子も見られている。

F児はA保育者の手元を追って見た後に、姿勢を元に戻して受け入れている。F児がA保育者の持つ食器の中を見ていた時は、口の中に入っている食材を飲みこんでから受け入れる場合と、顔を左に逸らす様子やA保育者から少し顔を後ろに引いて拒む姿が見られている。

5. G児（10か月）と保育者との関わり合い

表7 G児（10か月）の行為が見られた保育者との関わり合い

経過時間	番号	G児の行動	A保育者の行動
0:14			「おお、おいしいね」と言葉をかけて、汁椀をG児の前に持っていき、スプーンで具をすくって口へ近づける。
0:17	①-48	スプーンを確認するように見て、A保育者の顔を見ながら食べる。	
0:28			小鉢をG児の前に持っていき、「もぐもぐ」と言いながらすくった野菜を口に近づける。
0:30	①-49	小鉢の中を見ながら大きく口を開け、A保育者の顔を見ながら食べる。	
0:43			「ご飯、うん」と言いながら、茶碗をG児の前に持っていき、口へ近づける。
0:45	①-50	スプーンを見てから食べる。	
0:54			G児の前へ汁椀を持っていき、「うん」と言いながらスプーンで口へ近づける。
0:55	①-51	違うところを見ながら食べ、A保育者の顔を見る。	
1:09		A保育者の手元を見る。	
1:11	①-52	A保育者の顔を見て食べる。	「うん、パッくん」と言いながらスプーンを口へ近づける。
1:21			「あーん」と言いながら、スプーンをG児の口へ近づける。
1:26	②-12	A保育者の顔を見ながら、眉間に皺を寄せる。ゆっくりと飲み込む。	
1:52			「もぐもぐもぐ」と言葉をかけながら、スプーンですくったじゃがいもを口に近づける。
1:54	①-53	スプーンを見ながら食べる。	
2:02		右手を出して、汁椀に触れる。	汁椀をG児に近づける。
	②-13	汁椀の中をのぞきながら、右手で中を触ろうとする。	「うん」と言いながら、野菜をすくったスプーンを近づける。
	①-54	小さく口を開けて食べる。	「うん」と言いながら、汁椀を少し引く。
2:15		遊びスペースの方向を見ながら、小さく口を動かす。	「うん、あーん」と言いながら、G児の口へスプーンを近づける。
2:25		A保育者の顔を見ながら、口を動かす。	
2:26	③-1	口から出た1粒のご飯粒を左手の甲で入れようとする。	
2:34		口を小さく動かしながら、A保育者の手元を見る。	

2 : 37	② - 14	遊びスペースの方向を見ながら、ゆっくりと口を動かす。	小鉢をG児の前に持っていき、「あーん」と言葉をかけながらスプーンを口へ近づける。
2 : 59		体を前に倒して、A保育者の手元をのぞき込み、元の体勢に戻る。	
3 : 02	① - 55	小さく口を開けて、スプーンの先の分量を食べる。	「何が好きやった？ Gちゃん。お魚好きやった？ お野菜も好きやった？」と言葉をかけながら、スプーンにすくった魚を口へ近づける。
3 : 17	② - 15	右手を出して、スプーンを見つめながらお粥を触ろうとする。	スプーンですくったお粥を口に近づける。
3 : 21	① - 56	食べた後にA保育者の顔を見る。	スプーンを右に逸らし、「ん、ん」と言いながら、G児の口へ近づける。
3 : 52		A保育者の手元を見つめる。	
3 : 56	① - 57	スプーンを見つめながら、大きく口を開けて食べる。	お粥をすくったスプーンを口へ近づける。
3 : 52		A保育者の手元を見つめる。	
3 : 56	① - 58	スプーンを見つめながら、大きく口を開けて食べる。	お粥をすくったスプーンを口へ近づける。
4 : 17		カメラの方を向いて、左手を伸ばす。	
	② - 16	スプーンに気づいて顔を前に向ける。	「Gちゃん」と言葉をかけながら、お粥をすくったスプーンをG児の顔の前に近づける。
4 : 26	① - 59	口を開けて閉じ、再度口を開けてA保育者の顔を見ながら食べる。	「あーん、パッくん」と言いながら、スプーンを口に近づける。
4 : 42			「もぐもぐもぐ、おいしいね」と言葉をかけながら、じゃがいもをすくったスプーンを口へ近づける。
4 : 43	① - 60	違うところを見ながら食べる。	

(1) 保育者からの言葉かけ

保育者からの言葉かけについて表7を見ると、①-51でG児は、A保育者がG児の前へ汁椀を持っていき、「うん」と言いながらスプーンで口へ近づけている。G児は違うところを見ながら食べ、A保育者の顔を見ている。①-54では、G児がA保育者の持つ汁椀を触ろうとした後に、「うん、あーん」と言いながら、G児の口へスプーンを近づけている。すると、G児は小さく口を開けて食べている。②-16では、G児がカメラに左

手を伸ばすと、A保育者は「Gちゃん」と言葉をかけて、お粥をすくったスプーンをG児の顔の前に近づけている。G児はスプーンに気づくと、顔を前に向けている。その後の①-59で、A保育者が「あーん、パッくん」と言いながら、スプーンを口に近づけると、G児は口を開けて閉じ、再度口を開けてA保育者の顔を見ながら食べている。①-60では、A保育者が「もぐもぐもぐ」と言葉をかけながらスプーンを口へ近づけると、G児は違うところを見ながら食べている。②-12では、

A 保育者が「あーん」と言いながら、スプーンを G 児の口へ近づけている。G 児は A 保育者の顔を見ながら、眉間に皺を寄せながらゆっくりと飲み込んでいる。

(2) 食材や保育者の手元を見る

表 7 中の食材や保育者の手元を見る姿において、①-49 で A 保育者は、「もぐもぐもぐ」と言いながら小鉢を G 児の前に持っていき、すくった野菜を口に近づけている。G 児は小鉢の中を見ながら大きく口を開け、A 保育者の顔を見て食べている。①-52 では、G 児が A 保育者の手元を見ているところへ、A 保育者は「うん、パッケン」と言いながらスプーンを口へ近づけている。G 児は、A 保育者の顔を見て食べている。②-14 では、G 児が口を小さく動かしながら、A 保育者の手元を見ているところへ、A 保育者が小鉢を G 児の前に持っていき、A 保育者が「あーん」と言葉をかけてスプーンを口へ近づけると、G 児は斜め左前方にある 3m 離れた遊びスペースの方向を見ながら、ゆっくりと口を動かしている。①-55 で G 児は、A 保育者の手元をのぞくために体を前に倒し、元の体勢に戻っている。そこへ A 保育者が、「何が好きやった？ G ちゃん。お魚好きやった？ お野菜も好きやった？」と言葉をかけ、スプーンですくった魚を口へ近づける。G 児は小さく口を開けて、スプーンの先の分量を食べている。

(3) 口に近づく食具を見る

口に近づく食具を見る姿として表 7 の中で、A 保育者は①-48 において、「おお、おいしいね」と言葉をかけて、汁椀を G 児の前に持っていき、スプーンで具をすくって口へ近づけている。G 児はスプーンの中を確認するように見て、A 保育者の顔を見て食べている。①-50 では、A 保育者が「ご飯、うん」と言いながら、茶碗を G 児の前に持っていき、口へ近づけている。G 児は、スプーンを見てから食べている。①-53 では、A 保育者が「もぐもぐもぐ」と言葉をかけながら、スプーンですくったじゃがいもを口に近づけると、G 児はスプーンを見て食べている。①-58 では、G 児が A 保育者の手元を見つめているところへ、A 保育者はお粥をすくったスプーンを口へ近づけている。G 児はスプーンを見つめながら、大きく口を開けて食べている。

(4) 自らの手で食材に触れる

自らの手で食材に触れるという姿において表 7 によると、②-15 では、A 保育者がスプーンですくったお粥を口に近づけると、G 児は右手を出して、スプーンを見つめながらお粥を触ろうとしている。この後の①-56

で A 保育者は、スプーンを右に逸らし、「ん、ん」と言いながら口へ近づけている。G 児は、食べた後に A 保育者の顔を見ている。②-13 では、A 保育者が汁椀を近づけると、G 児は右手を出して汁椀に触れている。A 保育者が「うん」と言いながら、野菜をすくったスプーンを近づけると、G 児は汁椀をのぞきながら、右手で中を触ろうとしている。A 保育者は「うん」と言いながら、汁椀を少し引いている。③-1 で G 児は、A 保育者の顔を見ながら口を動かしており、口から出た 1 粒のご飯粒を左手の甲で入れようとしている。

(5) G 児 (10 か月) の「食材を受け入れる・受け入れない」という姿

タイミングを伝える言葉として、A 保育者が「うん」と言葉をかけると、G 児は違うところを向きながらも受け入れ、A 保育者の顔を見ている。「あーん、パッケン」という A 保育者の言葉には、A 保育者の方に意識を向きおとして、閉じていた口を開けて食べる G 児の姿が見られる。しかし、口の中に入ったままである場合では、G 児は A 保育者の顔を見ながら援助を受け入れず、眉間に皺を寄せながらゆっくりと飲み込んでいる。A 保育者が「もぐもぐもぐ」と咀嚼を促して援助を行うと、違うところを見つても受け入れることができる。G 児が汁椀を触ろうとしていたところへ、A 保育者が「G ちゃん」と呼びかけると、小さく口を開けて食べている。

A 保育者の手元を見たことで食べているが、口の開き方に大小の差がある場合や、口を開けながら A 保育者の顔を見て食べる姿が見られている。また、食材に目を向けていた後に、A 保育者が「あーん」と言葉をかけた場合でも他の場所に興味が向いて食べないこともある。

G 児はスプーンを確認するように見てから、A 保育者の顔を見て食べている。A 保育者が「ご飯、うん」と言葉をかけながらスプーンを近づけることで、G 児がスプーンを見る場面もある。G 児は A 保育者の手元を見ていたことで、近づくスプーンに目を向ける姿も見られている。

A 保育者が食材を口に運ぶ際に、食材に興味を示して触れようとする G 児の姿が見られている。しかし、その G 児の姿に対して A 保育者には、スプーンを逸らす姿や、汁椀を引いて触れないようにする関わりが表れている。そのため、G 児は A 保育者の援助を受け入れていない上に、手で食材に触れる機会を逃してしまっている。しかし、偶然ではあるが口からご飯粒が出たことで、G 児は左手の甲で口の中に入れようとしている。

6. I児（10か月）と保育者との関わり合い

表8 I児（10か月）の行為が見られた保育者との関わり合い

経過時間	番号	I児の行動	A保育者の行動
0:13 0:18	②-17	首を左へ大きくそらす。 体ごと首を大きく右へ向ける。	スプーンでお茶をすくい、I児の口へ近づける。
0:27 0:33	③-2	小鉢に右手を伸ばす。 人参を摘んで口へ入れる。 A保育者の顔を見ながら、両手を上げて2回揺らすように動かす。	「はい、どうぞ」と言いながら、小鉢ににゅうめんの野菜を入れて、テーブルに置く。
0:41 0:47	③-3	左手で小鉢の玉ねぎを摘み、口へ入れる。	小鉢に野菜を入れる。
0:50 0:55	①-61	左手を小鉢に伸ばしつつ食べる。 口を動かしながら、右手を小鉢に伸ばす。	スプーンですくったお粥をI児の口へ近づける。
1:03 1:11	②-18 ①-62	小鉢に右手を伸ばす。 小鉢とテーブルを右手で触る。 口を開けて食べ、A保育者の顔を見る。	魚をすくったスプーンをI児の口へ近づける。 「Iちゃん、お魚食べよう」と言葉をかける。
1:47 1:48	①-63	A保育者の顔を見てから食べる。	「あーん」と言いながら、魚をI児の口へ近づける。
2:14 2:16	①-64	口を開けて食べる。	スプーンですくったお粥を口へ近づけ、「パッケン」と言葉をかける。
2:28 2:29	①-65	大きく口を開けて食べる。	「あーん」と言いながら、スプーンですくったお粥をI児の口へ運ぶ。
2:38 2:42	②-19 ②-20	左手でテーブルを触っている。 左手を大きく動かして、テーブルを触っている。	「おいしいね、Iちゃん」と言葉をかける。 スプーンですくった魚をI児の口へ近づける。 「お魚さん」と言葉をかける。
2:43 2:48	①-66	スプーンを見ながら食べる。 口を動かしながら、左手でテーブルを触る。	「Iちゃん、Iちゃん。パッケン」と言葉をかける。
3:17 3:20	①-67	小さめに口を開けて食べる。	「うん、お汁どうぞ」と声をかけながら、容器を近付けてI児の口へ運ぶ。
3:57			「Iちゃん、パッケンこ」と言いながら、スプーンですくったお粥をI児の口へ近づける。

3 : 58	①-68	左手でテーブルを触るのを見ながら食べる。	
4 : 24			「I ちゃん、お魚食べよう。お魚さん」と言いながら、スプーンですくった魚をI 児の口へ近づける。
	②-21	左手をA 保育者の方へ伸ばす。	
4 : 28	①-69	左手を下ろしてテーブルを触りながら食べる。	「うん、パッくん」と言葉をかける。

(1) 保育者からの言葉かけ

保育者からの言葉かけについて表8を見ると、②-18では、I 児が小鉢に右手を伸ばしたところへ、A 保育者は魚をすくったスプーンを口へ近づけている。その後にI 児は、小鉢とテーブルを右手で触って受け入れている。その後の①-62で、A 保育者が「I ちゃん、お魚食べよう」と言葉をかけると、I 児は食べてからA 保育者の顔を見ている。①-63では、A 保育者が「あーん」と言いながら魚を口へ近づけると、I 児はA 保育者の顔を見てから食べている。①-64では、A 保育者がスプーンですくったお粥を口へ近づけながら「パッくん」と言葉をかけると、I 児は食べている。①-65では、A 保育者が「あーん」と言いながら、スプーンですくったお粥を口へ運ぶと、I 児は大きく口を開けて食べている。①-66では、A 保育者が「I ちゃん、I ちゃん。パッくん」と言葉をかけると、I 児はスプーンを見ながら食べ、口を動かしながら左手でテーブルを触っている。①-67では、A 保育者が「うん、お汁どうぞ」と言葉をかけながら、容器を近づけて口へ運ぶと、I 児は小さめに口を開けて食べている。①-68では、A 保育者が「I ちゃん、パッくんこ」と言いながら、スプーンですくったお粥を口へ近づけると、I 児は左手でテーブルを触るのを見ながら食べている。

(2) タイミングが合わない援助

表8におけるタイミングが合わない援助として、①-61では、A 保育者がスプーンですくったお粥を口へ近づけると、I 児は左手を小鉢に伸ばしつつ食べている。その後すぐに、I 児は口を動かしながら、右手を小鉢に伸ばしている。②-21では、A 保育者が「I ちゃん、お魚食べよう。お魚さん」と言いながら、スプーンですくった魚を口へ近づけると、I 児は左手をA 保育者の方へ伸ばしている。次の①-69では、A 保育者が「うん、パッくん」と言葉をかけると、I 児は左手を下ろしてテーブルを触りながら食べている。

(3) 手づかみ食べ

表8の中で手づかみ食べが見られた場面として、③-2では、A 保育者が「はい、どうぞ」と言いながら、小鉢ににゅうめんの野菜を入れて、テーブルに置くと、I 児は小鉢に右手を伸ばしている。その後にI 児は、人参を摘んで口へ入れ、A 保育者の顔を見ながら、両手を上げて2回揺らすように動かしている。③-3では、A 保育者が小鉢に野菜を入れると、I 児は左手で小鉢の玉ねぎを摘み、口へ入れている。

(4) 援助を受け入れたくない気持ち

表8で見られた援助を受け入れたくない気持ちとして、②-17でI 児は、A 保育者がスプーンでお茶をすくって口へ近づけると、首を右へ大きくそらし、体ごと首を大きく左へ向けている。②-19では、「おいしいね、I ちゃん」とA 保育者が言葉をかけながらスプーンですくった魚を口へ近づけると、I 児は左手でテーブルを触っている。続く②-20では、A 保育者が「お魚さん」と言葉をかけると、I 児は左手を大きく動かして、テーブルを触っている。

(5) I 児(10か月)の「食材を受け入れる・受け入れない」という姿

I 児は、A 保育者が「あーん」とタイミングを伝えようと、A 保育者の顔を見てから口を開けて食べる姿や、大きく口を開けて食べる様子を見せている。「うん、お汁どうぞ」という言葉かけに対してI 児は、小さめに口を開けて食べている。I 児が小鉢に右手を伸ばした時にスプーンが口へ近づくと、小鉢とテーブルを右手で触って受け入れている。続けて、A 保育者が「I ちゃん、お魚食べよう」と言葉をかけると、口を開けて食べてからA 保育者の顔を見ている。「I ちゃん、パッくん」という言葉かけを通してI 児は、食べた後に口を動かして左手でテーブルを触る姿や、左手でテーブルを触るのを見ながら口を開けて食べる様子が見られている。

A 保育者がスプーンですくったお粥を口へ近づけると、I 児は左手を小鉢に伸ばしつつ、口を開けて食べて

いる。その後すぐに、I児は口を動かしながら、右手を小鉢に伸ばしている。A保育者が「Iちゃん、お魚食べよう。お魚さん」と言いながら、スプーンを口へ近づけると、I児は左手をA保育者の方へ伸ばしている。続けてA保育者が「うん、パッくん」と言葉をかけると、I児はテーブルを触りながら、口を開けて食べている。

手づかみ食べをするI児の姿として、次のやりとりが見られている。A保育者が「はい、どうぞ」と言いながらにゅうめんの野菜を入れた小鉢をテーブルに置くと、I児は小鉢に右手を伸ばしている。その後にI児は、人参を摘んで口へ入れ、A保育者の顔を見ながら両手を上げて揺らすように2回動かしている。

援助を受け入れたくない気持ちでは、A保育者がスプーンでお茶をすくって口へ近づけると、I児は首を右へ大きくそらし、体ごと首を大きく左へ動かしている。また、「おいしいね、Iちゃん」とA保育者が言いながらスプーンですくった魚を口へ近づけた際には、I児は受け入れずに左手でテーブルを触っている。そこへA保育者が「お魚さん」と言葉をかけるが、I児は受け入れることなく、左手を大きく動かしてテーブルを触っている。これらの様子から、10か月におけるI児のA保育者の援助を受け入れたくない行動と判断できる。

IV. おわりに

1. 総合考察

本研究では、0歳児クラスの食事場面における、3人の子どもの「食材を受け入れる・受け入れない」という行為の個別具体的な要因について検討した。

9か月では、援助を受け入れる行動として、以下の事例を判断した。

F児は、小さく口を開ける姿やゆっくりとお茶を飲んでいて、さらに「お芋ちゃん」や「Fちゃん」という言葉かけがあることで、援助を受け入れた後に顔をしかめる姿や違う方向を向く様子が見られた。G児は、笑顔でスプーンを見てから顔を前に出して食べていた。また、「もぐもぐ」という言葉かけがあることで、チェアーから食台のある方へ体を乗り出そうとしていた気持ちを、保育者の持つスプーンに注目を向けていた。I児は、両手を上げて大きく口を開ける姿やゆっくりと近づいて取り込んでいた。そして、「いくで」や「うん」といった言葉かけがあることでスプーンの柄をかじりつつも食べる姿が見られ、次に食べる食材を伝えることで姿勢を元に戻して顔を前に出して食べていた。

つまり、保育者が近づける食具に向かって顔や口を前

に出して自ら食材を取り込もうとする行動が食材を受け入れる気持ちである。受け入れる姿には違いが見られるが、保育者からの食材や名前を呼ぶ関わりや食材を口へ運ぶタイミングを示す言葉かけがあることで受け入れる気持ちに繋がっている。

10か月では、以下の事例が援助を受け入れる・受け入れない行動だと判断した。

F児は、「Fちゃん、おいしいね」と言葉をかけてもらおうと姿勢を整えてお茶を飲んだが、「嬉しいね、Fちゃん」という言葉かけでは、A保育者が近づけるスプーンに対して勢いよく首を左に向けて拒んでいた。G児は、「あーん、パッくん」という言葉かけを通して、A保育者に意識を向きなおして食べたが、口の中に食材が入ったままの場合は受け入れなかった。I児は、小鉢に右手を伸ばした時にスプーンが口へ近づくと、小鉢とテーブルを右手で触って受け入れなかった。続けて、「Iちゃん、お魚食べよう」とA保育者が言葉をかけると、食べた後にA保育者の顔を見ていた。

つまり、食材を運ぶタイミングで保育者が言葉をかけることで、受け入れることに繋がっている。しかし、保育者が繰り返し同じ食材を口へ運ぼうとした時や子どもの口の中に食材が残っている場合、子どもが自ら食べ進めようとしている際には、保育者の言葉かけがあったとしても受け入れない姿が見られることもある。さらに、子どもが食べたいと思っている食材を食べられなかった場合や保育者が主体となって食事を進めようとした場合に、受け入れたくないという気持ちを示している。

3人の子どもの9か月と10か月における個別性のある行動については、以下の事例を判断した。

9か月のF児は、体ごと右に向けてA保育者の援助自体を受け入れたくない気持ちを示していた。10か月のF児は、食べたい食材が出てきて、A保育者が魚を口に運ぼうとすると顔を前に出して大きく口を開けて受け入れ、食べた後には両足を左右に動かす様子や両肘を曲げた状態で上げていた。9か月のG児は、A保育者がバナナを口へ近づけると、スプーンを見つめてから顔を前に出して食べ、右足を上下に揺らしていた。10か月のG児は、食材に興味を示して触れようとしており、偶然口から出たご飯粒を左手の甲で口の中に入れようとしていた。9か月のI児に対してA保育者は、I児が満足できるようスプーンに乗せる食材の量を調節していた。さらにA保育者は、I児が自ら取り込めるように、口の前に食材を近づけたり口の前で止めたりしていた。10か月のI児は、人参を摘んで口へ入れた後に、A保育者の顔を見ながら両手を上げて揺らすように2回動かしていた。

これらの行動から、食材を受け入れるための要因として、次の保育者の援助が挙げられる。まず、自ら食材を食べようとする行動に繋げるため、保育者が子どもの口の前に食材を近づけたり口の前で止めたりする関わりである。次に、食べ進めることに対する満足感を育むために、食具に乗せる一口分の量を調節しながら口へ運ぶ関わりである。そして、「この食材を食べたい」という気持ちに添えるように、その食材を口へ運ぶ関わりである。

このように、9か月の子どもにとっては、保育者が子どもの食べ進める様子を把握しながら、「食べてみたい」という子どもの思いを育むような言葉かけや適切なタイミングでの援助が重要である。10か月を迎えた子どもには、「自ら食べ進めたい」という意欲を大切にしながらも、他の食材に目を向けて食べ進められるように行う関わりが重要となる。離乳食を援助する際には、ただ完食することを目標として食材を食べさせるのではなく、「今は食べたくない」という子どもの思いを汲み取ることが保育者には欠かせない。食材を受け入れたくない子どもの行動が見られた際には、自ら食べたいという気持ちを持てるように「おいしいね」「嬉しいね」という保育者の言葉かけを通して、「一口食べてみよう」と誘いかける関わりも必要である。こうしたやりとりを通して、満足感や喜び、食べることが楽しいという気持ちを育むことができると言える。

2. 今後の課題

本研究では、3人の子どもの9か月と10か月の事例におけるやりとりを、食事開始から5分間に限定して分析を行った。同じ食事場面で分析していないやりとりについての検討や、複数人での読み取りなどを通して分析を深めることが必要である。今回調査した事例は、1人の保育者が3人の子どもに対して援助を行った限定的な場面であるため、さらに多くの子どもを観察することが課題である。今回の研究で対象とならなかった事例を検討した際には、観察時間や子どもの「食材を受け入れる・受け入れない」という回数、実際の姿も異なると考えられるため、引き続き分析を進める必要がある。また、複数人の保育者が行っている援助を分析することで、0歳児の食事場面における保育者の詳細な実践知を明らかにすることに繋がると考えられる。そして、「食材を受け入れる・受け入れない」という子どもの行為と、特定の保育者による継続的な援助との結びつきについて検討することも今後必要である。

文献

- 遠藤純子・小野友紀・池谷真梨子 (2019). 0歳児の食に関して保育士は何に悩んでいるかー学びの機会の必要性を考えるーアレルギーの臨床 39 (7), 57-59.
- 遠藤純子・小野友紀・池谷真梨子 (2019). 離乳期における保育者の援助特性に関する一考察ー自食移行期の言語的調整と身体的調整に着目した事例的検討ー 学苑 (昭和女子大学学苑) 初等教育学科紀要 944, 3-4.
- 石黒広昭 (2003). 乳児の食介助場面の相互行為的分析ー社会的出来事としての食事ー 北海道大学大学院教育学研究科紀要 91, 25-42.
- 伊藤美保子・西隆太郎・宗高弘子 (2020). 乳児期における食具の使い方に関する研究: 0, 1, 2歳児クラスの保育におけるスプーンをめぐる ノートルダム清心女子大学紀要人間生活学・児童学食品栄養学編 44 巻1号, 12-22.
- 「授乳・離乳の支援ガイド」改訂に関する研究会 (2019). 授乳・離乳の支援ガイド, 30-31.
- 河原紀子 (2009). 保育園における乳幼児の食行動の発達と自律 乳幼児医学・心理学研究 18 (2), 125-126.
- 厚生労働省 (2017a). 保育所保育指針 フレーベル館, 13-14.
- 厚生労働省 (2017b). 保育所保育指針 フレーベル館, 99-100.
- 厚生労働省 (2018). 保育所保育指針解説 フレーベル館, 14.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局 (2004). 楽しく食べる子どもにー食からはじまる健やかガイドー フレーベル館, 13.
- 森田悠子・高木道代 (2013). 保育士による離乳の援助の現状 佐野短期大学研究紀要 24 号, 67.
- 中澤弥子 (2001). 乳児の哺乳および摂食機能の発達: 食欲, 摂食量, 手づかみ食にに着目して 長野県短期大学紀要 56, 98.
- 西村真実 (2020). 担当制で進める0・1・2歳児の保育の基本 ぴかりのくに株式会社, 52-54.
- 根津明子 (2010). 乳児において文化としての「食べる」行為はいかにして成立するかー離乳食援助場面を通してー 日本教育方法学会紀要 教育方法学研究 35 巻, 56.
- 大方美香 (2020). 保育所等における食育とは 社会福祉法人全国社会福祉協議会全国保育士会 子どもの育ちを支える食ー保育所等における「食育」の言語化ー, 10-12.
- 山王堂恵偉子 (2019). 第6章 生活や遊びを通しての保育とその環境、阿部和子 (編) 改訂乳児保育の基本 萌文書林, 141.
- 淀川裕実・酒井治子・林薫・志賀口大輔・渡邊貴幸・曾退友美・池谷真梨子・伊藤優 (2019). 低年齢児の食事場面での保育者の援助と環境構成に関する研究 保育科学研究 第10巻, 46-66.
- 淀川裕実・酒井治子・林薫・志賀口大輔・渡邊貴幸・曾退友美・池谷真梨子・伊藤優 (2022). 乳児期の食事場面における子どもの心地よさを支えるための要因に関する研究ー子どもと保育者の関係性構築のプロセスに着目して 保育科学研究 第11巻, 31-52.

謝辞

本論文を執筆するにあたり、ビデオ撮影のご協力をいただきました対象園には深く感謝申し上げます。そして、執筆に関してご助言ご指導をいただきました大阪総合保育大学大学院の大方美香先生、高根栄美先生に心より御礼申し上げます。

付記

本論文は、筆者の大阪総合保育大学大学院児童保育研究科児童保育専攻博士前期課程における令和3年度「0歳児の食事場面における『心地よさ』の検討－保育者・

子どもの関係性に着目した保育実践をもとにして－」を元に加筆修正したものである。

なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

Action Analysis of a Meal Scene in a Class of 0-Year-Old Children : Focusing on the Relationship with the Nursery Teacher

Yoshihiro Kawanaka

Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School

The purpose of this study was to identify, in a group childcare setting, the individual factors that influence whether or not an infant will eat the food presented to it. To this end, the case of three infants below one year old that were registered to a nursery is used. The infants were observed at nine and ten months of age. Analysis was conducted using a correlation table created on the basis of video recordings of the infants during mealtimes.

At nine months of age, a common factor was that each of the three would bring their face forward to receive assistance from the nursery teachers. However, some behavioral differences were also observed at that time. Child F would open her mouth a little and drink its tea slowly. Child G would put her face forward with a smile to eat after she saw the spoon. Child I would raise both hands, open her mouth widely, and slowly bring herself closer to eat. At both nine and ten months of age, a shared factor among the three children was their eating with the help of verbal communication from the nursery teachers. However, there were some differences in behavior between nine and ten months of age in terms of their receiving help from the nursery teachers.

Expressing individuality included infants moving their whole bodies towards the left in response to a nursery teacher, showing enjoyment and excitement at eating their favorite foods, and expressed their desire to eat their food autonomously. The nursery teacher assistance behaviors we observed included adjusting the amount of food in the spoon to the infant's satisfaction and the proximity of the spoon to the mouth so that the infants could bring it into their mouths unassisted. Nursery teacher assistance behaviors we observed included adjusting the amount of food on the spoon to the infant's satisfaction and adjusting its proximity to the mouth so that the infant could bring it into its mouth unassisted.

Key words : infant care, baby food, behavior analysis, nursery teacher, assisted eating

